
華蝶仮面と愉快的仲間？

緋翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華蝶仮面と愉快的な仲間？

【Nコード】

N8746M

【作者名】

緋翠

【あらすじ】

華蝶仮面と愉快的な仲間？が成都とかを駆けまくる。

「星？何してるんですか？」

「翡翠か、なに気にすることは無い。」

「一刀、貴方はどう思います？」

「とりあえず読んでみてくれ。」

とりあえず設定

性、名、姜維

字 伯約

真名 翡翠

諸葛亮（朱理）の弟子として軍に入ったが、弟子というより仲の良い友達になってしまった。

北郷軍の武将、または軍師として働いている。

一刀とは唯一の男友達

見た目

髪の色

月光色

瞳の色

薄紫

仮面の色

緑

女子的な顔立ちをしている。

普段生活するときは、髪を腰辺りまでおろしている。

華蝶仮面になっているときは髪を一房にまとめている

服装

鳥の羽根を模した袖の長い黒い着物を来ている。

この服は星にお揃いだ、と言われて貰ったため色と模様以外はほぼ星の服と一緒。しかし、星に頼み込んで少し足の部分を膝の辺りまで伸ばして貰い、下にスパッツを履くことを許可してもらった。

無論胸の辺りは、開いてはいない

男物より女物の服をよく着る。（一刀の趣味や星のせいだ）

武器

双剣

暁・不知火

光のもとだと暁のような輝きを放つ双剣

誰に貰ったかは、そのうち。

最近の悩み事は、町を歩くと、男に声をかけられたり、商人に女物の服を進められたりする事（たまに無理やり押し付けられたりする。

）

実は前世の記憶を多少持っている。（天界の言葉がわかるのもその為）

前世はS E E Dの世界にいたが、最後の戦いの時にレイの乗ったレジェンドのドラグーンに撃たれて死んでいる。

S E E Dは持っている。

武力

真面目にやれば翠と同等

S E E D覚醒時は、数十秒なら、本気の呂布と撃ち合える知識

愛紗より上、朱里より下

前世の記憶が多少はあるため天界の言葉も朱里より分かる。

指揮能力

状況判断や情報整理等の部分は通常時は朱里より劣る。しかしS E E D覚醒時は朱里を少し上回る。部下からの信頼は厚いため、命令等は翠より上

人の呼び方

一刀 ご主人様、周りに人が居ないときや怒っているときは一刀

趙雲 星、一号

関羽 愛紗殿

諸葛亮 師匠、会議の場などでは、朱里殿

黄忠 紫宛殿

馬超 翠、軍師の立場の時は翠殿

張飛 鈴々

璃々

貂蝉 三号、貂蝉

これから増やしていきます。

第1部、いきなり始まる第1章（前書き）

初めて書く小説です。

いたらないところがあるかも知れませんがよろしくお願いします。

では始まり～

「第1部いきなり始まる第1章!!」

『……………一号？なにしてるんですか？』

「……………宣伝だ」

第1部、いきなり始まる第1章

男たちの眼に映っていたのは、白い風だった。

風の塊だった。

暴風だった。

嵐だった。

人も物も関係ない。

土煙を巻き上げて、障害物を吹き飛ばしていく。

聞こえてくるのは、金属音と破砕音。

それに男たちのうめき声

見えるのは地に伏した野盗の群れとハラハラ舞う黄色い雪。

いや、それは雪ではない。

黄色い布。

すなわち、黄巾。

ゆえに彼らが、

その装いから黄巾党と呼ばれる野盗であることは疑いようもなかった。

では、この白い風の正体は何なのか？

そんなもの

黄巾党にも分かるはずなかった。

、
「ふざけやがって！何もかも無茶苦茶だ！」

黄巾党の首領は、意思を持って部下たちを蹴散らしていく二つの白い竜巻を前にして、怒りを露にすることしかできなかった。

大陸全域で猛威を振るう無頼の徒でさえ、

所詮は人の身。

自然災害を前にして人間にできることなどたかが知れている。

だが、そう思えるのは、相手が本当の自然災害なら、だ。

「アニキ、何やってんですか！？早く逃げないと巻き込まれちまいますよ！ありゃ妖怪変化だ！魑魅魍魎の類に決まってまさあ！」

首領の腕を小柄な体格の部下がつかむ。

だが首領は動かない。怒りの形相で竜巻を睨み、自らを押し倒そうとする暴風に歯を食いしばって耐えるのみだ。

「馬鹿なことを言うな、チビ！子供向けの童話じゃねえんだぞ！？妖怪やら妖術やらが実際にあってたまるか！」

「妖怪変化は人間に化けることもできるって、俺の婆さんが言ってやした！人間が風に化けたんだからあればバケモノに違いねえですよ！」

「……………ほう」

その時、風の中から朗々と声が響いた。

「私たちのような美女に対して妖怪変化とは失礼な物言いだな」

『一号……私は男ですよ』

「ひい！？な、何か喋りやがったっ！？」

「落ち着け、チビ！見ろ、風の中に人がいやがる！槍を振り回して風を起こしていただけだ！だから言っただろ！妖怪なんてこの世にいるわけねえって……」

よくよく目を凝らせば、アニキの言う通り、風の中には人影があった。

年の頃は二十を数えてはいまい。

晴天の空を思わせる鮮やかな碧色の髪

もう片方は、夜空の月を思わせる鮮やかな月光色の髪

両者共、

それは一房に束ねられ、山河を行く溪流のごとく背に流されていた。

容姿は美麗にして、固く引き締められた唇には艶やかに朱の輝きが

宿っていた。

一人の衣装は蝶の羽根を模した袖の長い華美な芸妓もの。しかもふくよかな胸部と艶かしい大腿部を晒すことで、かの者が女性であることを強烈に意識させる。

もう一人の衣装は鳥の羽根を模した袖の長い上着。しかし、それを適当に着ているため性別はわからない。

しかしその二人の服装で何より目を引くのが、目元を覆う蝶の仮面とその手に握られる背丈を越える二又の槍と暁の輝きを放つ双剣であった。

ゆえにその容姿たるやまさに怪人。

だからこそ黄巾の徒が二人を魑魅魍魎妖怪変化の類と呼んでも違和感はない。

「……人とは思えぬ神々しいまでの美しさ。そういう意味であれば……なるほど、理解できぬでもないか。」

「……あなたのそのポジティブな考えは一体何処から来るのですか

「？」

形の良い唇の口角がクツと持ち上がる。その眼光は、今や立っている者のほうが少ない建設中の砦の一角、アニキとチビのいる場所に向けられていた。

「ア、アニキ！あいつらがこっち向いた！」

「狼狽えるんじゃないねえ！どれだけ強かろうと人間の女に変わりはねえ！」

「だからあれは人間じゃなくて……」

「うるせえっ！俺には成都一の鍛冶職人が作った宝刀《黄龍缶切刀》がある！妖怪だろうとなんだだろうとまっぴらにしてやらあ！おい、そこの……ぶえっ！」

言い終わるより先に、槍の柄がアニキの脳天に降り下ろされていた。

「え、アニキ……？」

「……まだ台詞終わってない……い……」

一足飛びと呼ぶのは容易い。だがその速度たるや人の目が追いつけ

るものではなく、まさしく妖術の類、瞬間移動にさえ思えた。

「ん？何か言っていたのか？それはすまなかったな」

特に悪びれた口調でもなく、蝶仮面の女性は槍を下ろして言った。

『少しは話を聞いてあげたらどうです。一号』

「しかし二号、気付かなかったから仕方がないだろう。」

二人がそう話していると

「な……何なんだお前らは！成都の兵隊なのか！？」

「フツ。下衆に名乗る名は持ち合わせておらん」

「いや、せめて名乗ってくれよ！これじゃホントに自然災害じゃねえか！」

『名乗りぐらいはしてあげましようよ。』

「ふむ……それも道理か。自分を打ち倒した相手の名前も分からぬでは、黄泉路で迷ってしまうやしれんからな。では二号も一緒に……」

『仕方ないですね……』

蝶仮面の二人はビシッとチビの鼻の頭を指差した。

『正義の花を咲かせるために、』

「美々しき蝶が悪を討つ！」

その指先を翻して、二人は後方に宙返りをする。

『「美と正義の使者、華蝶仮面！」』

続けて二又の槍と双剣を交差させる。

その槍と剣をビシッと構えて、二人は最後に妖艶な笑みを浮かべた。

『「悪逆無道の匪賊より無幸の庶人を救うため、ここに参上！」』

長台詞を一息に言って二人　華蝶仮面は堂々と胸を張った。

その時、偶然にも雲が晴れる。

陽光は祝福するように二人を照らし、その姿を神々しく飾り立てていた。

第1部、いきなり始まる第1章（後書き）

この調子で頑張ります。

『僕まだ名前も出て無いんだけど……………』

気にしない、気にしない

第2章、唐突に……………（前書き）

ようやく名前が出てきたよ！

『……………遅いでしょ』

「気にするな、私は気にしない」

第2章、唐突に……

数日前

「人身売買？」

いつものように自室で執務を行っていた北郷一刀は、長身黒髪の女性の報告を、オウム返しに聞き返した。

「はい。人身売買です」

黒髪の少女 関羽は淡々と告げる。

「そんなことがこの成都でまだ行われているってのか？」

つい最近まで、日本の一都市に住む、聖フランチェスカ学園の男子学生に過ぎなかった一刀にとって人身売買なんてのはフィクションかニユースの世界の出来事だった。しかしこの、一刀が飛ばされてきた「三國志世界に似た異世界」では、まだ身近な事件であるのかもしれない。

現代日本からやってきた経緯から、関羽に天界から降臨してきた天の遣いとして扱われ、いろいろあって一刀は北郷（蜀）の王という立場にあった。

そのため、国の最高権力者である彼に、人身売買は他人事では済まされない。

それを理解しているのだろう。関羽はよりいっそう、眉宇に力を込め、自省するように言葉を紡いだ。

「……責任は国防を任されている私にあります。警備のものを対策に当たらせると共に、捜索隊に成都周辺の捜査を急がせます」

「それはいいんだけど、今まで手がかりひとつなかったのかい？」

「いえ……」

関羽の瞳が泳ぐ。

嘘のつけない彼女のそうした仕草の意味を、一刀はよく知っていた。

「つまり手がかりはあるんだ？」

「はい……。しかし、なんとなくいいのか……それに兵たちの見間違いの可能性もありますので……」

「いいよ。聞かせて」

「はい。実は……消えるのです」

「消える？」

「刀は首をひねった」

「はい。逃走した者たちを町外れの小屋の中に追い詰めたところ……小屋ごと蜃気楼のように消えてしまったと……」

「……イリユージョン？」

「鑄る助……ん……？ご主人様のおっしゃる意味は分かりかねますが、ともかく忽然と消えてしまうと、兵士たちは証言しています」

「ウーン。そりゃ確かに不可解だなあ」

「部下の責任逃れだとは思いたく無いのですが……」

「いや、うちの国にそんなことを言うやつはいないさ。彼らがそう言うなら、そういう道具があるんだろ。そうだな……こういう調査が得意そうな人っているかな？」

「それならば私に名案が」

開けっ放しのドアの向こうから、風に揺られた碧色の髪が流れてきていた。

それだけで一刀も関羽もそれが誰であるかを悟る。

趙雲であつた。

『ご主人様、書類を持って来ました』

彼女の後ろから、月光色の髪が舞っていた。その色で一刀たちは誰か分かる

姜維だ

一刀は彼女たちが気配も感じさせずに現れたことに驚き、関羽はまづ盗み聞きしていた彼女たちの態度に嫌悪を示していた。

「星！翡翠！ご主人様の部屋を覗き見など、行儀が……」

「まあまあ。愛紗もそんなに目くじら立てなくていいよ。翡翠は書類を持って来たみたいだしね。それで星。その名案ってヤツ、聞かせてくれるかい？」

二人は彼女たちの《真名》を呼び、入室を許可する。

《真名》とは、一刀が最初に学んだこの世界特有のルールだった。

名のある武将たちは、多くの場合、姓と名以外にも字と呼ばれる名を持つ。

関羽ならば姓を関、名は羽字は雲長という具合だ。

そしてもう一つ、本当に親しい者にのみ教える独自の名が《真名》であった。

《真名》は、自らが認めた相手に無ければ呼ばせることさえ禁忌だ。もし見知らぬ人間が真名を呼べば、それはその人間の生き様さえも汚す侮辱行為となる。

だからこそ、彼女たちが気軽に互いの《真名》を呼び合うのは、一刀を頂点として強固な信頼関係を築いている証拠でもあった。

一刀は関羽にもう一度、状況を説明させる。話を聞きながら、いちいち頷いていた趙雲は、しばらく考える素振りを見せた後、しれっと言った。

「無理に相手の正体を探る必要など無いのでは？」

「どういふこと？」

一刀は趙雲の言葉を理解できず、翡翠に聞いた

『多分、星が言いたいことは、相手が幻に姿を隠すならば、我らは森の中に木を隠せばよい。つと言いたいんですよ』

一刀は趙雲の方を向くと趙雲は頷き

「つまり……佯作戦か？」

「その通り。察しがよいですな。主は」

「……いや、パターンと言えばパターンだな。」

「バイタン
白湯？」

『パターンですよ。天界の言葉でよく起こる事などを指す言葉です。』

「へえ、ならそういうことです。」

『しかし……そうなると誰を送り込むかですね。敵の数が分からない以上、最大の戦力を投入したいところですが……』

「あまりに大人数ではかえって動きが取りづらい。と言いたいのだろう翡翠。」

『ええ、ですので、一騎当千の猛者が数人。人心の掌握に長ける者も欲しいところです。』

「それなら愛紗に任せたいところだな。どう?」

「ご主人様っ。わ、私は顔を知られすぎておりますし、その、変装のような手段はどうにも苦手ですって……／＼／＼」

「確かに愛紗では人買いなど、誘拐される前にのしてしまいそうですな」

「それなら翡翠はどうだい?」

『僕は……その……一人じゃ無理です。一応文官なんで……／＼／』

「いついつ時にそうやって逃げるのか?それなら星はどうだい?」

「ふむ。言い出しっぺでもありますし……うむ、引き受けましょう」

こうして、趙雲を囷にした誘拐団討伐作戦は、決行されることになったのだった。

もつとも囷作戦は意外な展開を迎えることになったのだが。
（なんで囷部隊じゃなく、様子を見にきた俺が捕まってるんだろうなあ）

黄巾党の密かに建設していた砦の側にある広場。

そこに集められた人質の輪の中で、一刀は華蝶仮面の立ち回りをぼんやりと眺めることしかできなかった。

いつの間にか人質の中に潜入していた華蝶仮面　というか、趙雲と姜維　は、いったいどこに隠していたのか、蝶の仮面と二又の槍と双剣を取り出し、周囲にいた黄巾党をバツバツとなぎ倒し

ていったのだ。

黄巾党の生き残りたち、それに一連の騒動を間近で眺めていた人質たちは、あまりのインパクトに華蝶仮面を見上げるくらいしか反応を返せない。

それも仕方ない。

華蝶仮面の格好は、それっぽい特撮作品を見たことのない人々にとつてはショックが大きすぎる。

それは、ギャグでもごまかしているのでもなく、一刀を除いて華蝶仮面の正体に誰一人気付かないことから窺い知れるものだった。

（……特撮もののお約束ってことか……？）

だが、そんな一刀の思考も、数瞬後には打ち破られることになる。

華蝶仮面（星の方）と直接対峙していたチビという名の黄巾党が、

記憶の片隅から彼女たちの噂を引っ張り出したのだ。

「華蝶仮面？まさか……お前があゝの華蝶仮面か！？」

「いかにも」

華蝶仮面は頷いた

「どの勢力にも属さず、成都で悪党を退治してまわっている武狭……」

「いかにも」

「派手好きで、子供たちにも大人気……」

「いかにも」

『一号あまり調子に乗らないほうが……』

（翡翠………心配なんだな。）

「というよりも子供たちにしか人気がなく、成都を警備する北郷軍にすら迷惑がられているという……自称、正義の味方」

「いかに……いや、そんなことはない。」

『誤解されるようなことはいつぱいありますがね。』

華蝶仮面の表情がわずかに曇る。

「それから……」

「ええい、黙れ！罪なき庶人を誘拐し、あまつさえ異国に売り飛ばそうとする下衆どもよ！我が槍を正義の鉄槌と心得よ！」

「『逆ギレ！（かよ）』」

（二人の息があつたなあ今）

「ちょっと待ってくれよ！」

チビは思わぬところで彼女の怒りを買ってしまったことを悟り、周

罅を見回した。

一刀と目があった

（こっち見んな！）

、

第2章、唐突に……………（後書き）

感想やアドバイス、誤字などが有りましたら教えてください

『お願いします。』

「主殿もほら」

「おう、お願いします」

第3章 我が主に手を出すな!! (前書き)

さあさあ 一刀はどうなってしまうのか。

『良いから始めなさい!』

「第3章我が主に手を出すな!!」

「星………筋肉があ、筋肉があ」

『大丈夫ですか?ご主人様』

第3章 我が主に手を出すな！！

一刀の思いが通じたのか、チビの声は、人質たちの近くに寄っていたらしい相棒に向けられた。

「おい、デク！さらってきた人質を盾にしろ！」

「わ、わかったんだな。大人しく捕まってくれと、う、嬉しいんだな……」

チビと対照的な巨大な腕が、ぬうんと一刀に伸ばされていた。

（だから、なんで俺なんだよ！？）

一刀は抵抗するが、一度つかまれてしまうと逃げようがない。

デクの顔を見ながら、一刀は心の中で怒鳴る。

が、デクの手はギリギリと腕を締め付け、それ以上の抵抗を許してくれなかった。

そうこうしているうちに、華蝶仮面の前から逃げ出したチビがデクに加わる。二人がかりで掴まれては、さすがに自力で逃げることはできそうにない。

「よし、人質はもういい！お前は用心棒の先生がたを呼びに行け！」

チビの呼びかけにデクは緩慢に走り出す。

「くそっ……。華蝶仮面！俺に構わず、こいつを倒せ！」

一刀が叫んだ瞬間、チビは体をすくめ、一刀の腕を捻りあげて背に隠れたまま、じりじりと後ろに下がり始めた。

距離を取って逃げる時間を稼ぐつもりらしい。

「う、動くんじゃない！少しでも動いたら、コイツの命を……」

『勇敢な青年よ、良いのですか？』

華蝶仮面はチビの恫喝を完全に無視して、一刀に話しかけた。

やると決めたら、迷わない。

おそらく、それが彼女らの心情だ。

一刀は押しつけられた冷たい刃の感触を背中に感じ、体を緊張させた。

無意識にブルブルと体が震え始める。

喉が乾いて仕方ない。

唾を飲み込もうにも、口の中はカラカラに乾ききっていた。

異世界にやってきたばかりの時、暴漢に絡まれて感じた、死の感覚が蘇ってくる

さっきの威勢は、完全に失われていた。

「……やっちまえ」

だが危険を訴える体に反して、一刀の口は端的にそう告げた。
華蝶仮面の剣が、静かに持ち上がる。

「くそっ……!!」

人質が無意味であることを悟り、チビは一刀を突き放し後ろに向かつて駆け出そうとするが……その顔に柔らかいものが当たった。

それは妙に生暖かく、弾力があつた。

チビはゆっくり顔を離す。その視界全てがピンク色に覆われた。

首を捻り、顔を上げてみる。

「イヤン」

そこに立っていたのは男だった。

逆光になって顔は見えない。

チビは男の顔を見るのを諦める。

それでも、目元に蝶の仮面を装着しているシルエットだけは見逃さない。

それはつまり、彼が華蝶仮面の仲間であることの証なのだから。

しかし、この男の場合、突筆すべきは蝶の仮面ではなかった。

彼の特徴を一言で表現する言葉を探すなら、

スキンヘッド

マッチョ

ピンクの紐パン

……あるいは、ハードゲイ

続けて言うのならば、

スキンヘッドのマッチョなハードゲイが、ピンクの紐パンと蝶の仮面のみを身につけ、仁王立ちしている……

「ぶるあああああああああああああああああ！」

直後、男は瞳を光らせ、吠えた。

「ぎゃあああ~~~~~!？」

チビは叫んだ。

「おわあああああつつ！！」

ついでに一刀も叫んでいた。

「人質をとるなんて、男の風上にもおけないわ！愛の鞭で目を覚まさせてあげるわよん！」

丸太のような太い足が、砂埃を巻き上げて持ち上げられる。

そして落ちる。

踵は、チビの頭上でピタリと止まった。いや、止まったように見えた。

「喝ーーーーーっ！」

その瞬間、一刀は目の前でかみなりが落ちたかのような衝撃を感じた

気がつけば、チビは顔面を大地にめり込ませて動かなくなっている。

「男らしさってのがどういうものか、しっかり学んでから、目覚めてねん」

「……もう二度と目覚めないような気もするけどな」

『青年よ、それを言うてはダメだ？』

茫然自失の一刀が呟くと翡翠の華蝶仮面が突っ込んだ。

（この風貌で貂蟬なんて名前なんだから、この世界の異常さがよくわかるよな……）

彼と初めて出会った時に酷く驚いたのを、一刀は思い出す。

貂蟬といえば、世界三大美女にあげられてもおかしくない、悲劇のヒロイン。それが美少女でなく、こんなおっさんだなんて誰が想像できよう。「さ、あなたは捕らえられていた女の子たちを連れて逃げてちょうだい。この周り一帯に不思議な霧を発生させて、平原の風景を投影するカラクリがあるみたいだから、帰り道で迷わないように気をつけてね おそらくこれが、今までこいつらの隠れ家が見つからなかった理由だと思うわ」

「そういうことが。けど、そんなところよく見つけて入って来られたな」

「そこはオトメのヒ・ミ・ツ …… んだけど話しちゃう 実はこっさりアナタの匂いと二号の匂いをたどって来たのよん！」

「ある意味、恐ろしいヤツだな」

『…………… キモチ悪い事を言わないでください？』

「と、とにかく、わかった。助かったよ、貂蟬」

一刀は貂蟬にそう答える

すると貂蟬は紅を引いた唇の前で、人差し指を左右に振った。

「あら、私は貂蟬なんてステキっぽい名前じゃないわん 私は華蝶
仮面三号。あそこにいる一号とここにいる二号の相棒よん」

華蝶仮面三号を名乗る男は槍を担いで敵を探している一号とここに
いて一刀と一緒にツッコミをする二号を指さす

こんなハードゲイが二人もいてたまるか、と思いはしたが……一刀
は反論せず素直に従うことにした。

「よし。とにかく、あとは任せた」

一刀は周りの女性たちに声をかけ、移動を始める

『さて、青年よ』

最後に移動をし始めた一刀に声がかかる。

二号だ

「なにか？」

『あの時、僕が貴方の命と黄巾討伐を秤にかけたことを起こらないのか？今回は良かったけど大事になっていたかも知れないんですよ？』

「だって三号が近くに来ていたのを知っていたんだろ？そりゃ、ちよつとはびっくりしたけどさ。結果として俺も助かったし、増援が来る前に人質も全員解放できたし、良かったじゃないか。だいたい、やれって言ったの俺だぜ？もっとも今ごろ、震えが来ちまって格好つかないけどな。」

一刀がそう言つと一号が近づいてきて

「しかしどちらもうまく言ったのは運だ。本来ならば、どちらかを切り捨てなければならなかった。自分の命がかかっている時に、あまり簡単に判断しないことだ」

強い口調とは裏腹に、目一杯、心配してくれている華蝶仮面たちの様子が少し可笑しくて一刀は思わず噴き出してしまった。

「ああ、気をつけるよ。」

華蝶仮面たちの眉宇が怒りに吊り上がるのを見て、一刀は逃げるように霧の壁をくぐる。

我が君にも困ったものだな翡翠

ええ、まったくです。

一刀は華蝶仮面から、そんな呟きを聞いたような気がした。

第3章 我が主に手を出すな!!（後書き）

感想やアドバイス、誤字などが有りましたら教えて下さいお願いします

『よろしく』

第4章 モブキャラには結構可愛い娘たまにいますよね（前書き）

モブキャラはたまに可愛い娘がいるよね。

「ああ、特にアニメになると多くなるよね」
『ご主人様、なんの話？』

「と、言うわけで第4章モブキャラはたまに可愛い娘がいるよね！」
「翡翠モブキャラとはなんだ？」

第4章 モブキャラには結構可愛い娘たまにいるよね

女たちを解放する三人の華蝶仮面をデクに率いられた武装集団は眺めていた。

ある者は槍を、ある者は棍を、ある者は馬に騎乗し、デクの後ろに悠然と続いている。

その数一六名。

彼らこそチビが《用心棒の先生》と呼んだ男たちであった。

「あ……アニキとチビが、もうやられてしまってるんだな……」

デクがオロオロと倒れたままのアニキに近寄っていく。体を揺さぶられたアニキは、それで目を覚ましたようだ。

「ア、アニキ。だ、大丈夫なんだな？」

「……くそ、油断したぜ。お前はチビと《あれ》を持って逃げる準備をしておけ。ヤツらの相手は用心棒の先生がたに任せる。勝てないまでも時間稼ぎにはなるはずだ。《あれ》さえ残ってりゃ、まだ

出直せる！」

「わ、わかったんだな」

「勝てないまでも、とはご挨拶だな。」

そんなアニキの前にデクをも凌駕する巨漢が立ちはだかった。手には金棒。その金棒は彼の身長よりもさらに大きく、とてもひとが振り回せるようなものには見えなかった。

「いやいや。もちろん先生がたの実力は信用しております。始末してもらっても一向に構わないんですがね……」

アニキとデクは用心棒の男にへつらうようにしてその場から立ち去る

男は彼らの動向に目もくれず、華蝶仮面たちを睨み付けた。

「ほほう。どんな豪傑かと思えば、美しい女性ではないか」

「ふむ、審美眼は持ち合わせているようだな。だが一つ訂正してもらつぞ。ただの美女ではなく、絶世の美女と言わせてもらおう」

『僕は絶世の美男子が良いですね』

「我が名は、青牛角！ならばその仮面、引っ剥がしてその言葉を確かめてやるわ！ぬああああっ！」

青牛角の金棒が、力強く華蝶仮面の頭上に降り下ろされた。

重量を破壊力とする金棒の一撃は、それを振るう青牛角の膂力と相まってどんな武器でもへし折るだけの威力を持っていた。

しかも彼の初撃はつねに渾身の一撃だ。当然、折れるのは武器だけとは限らない。

しかし、華蝶仮面はあえて金棒を受ける事を選んだ。

金棒が蝶の仮面を破壊しようと迫る

その刹那、間に双剣が入り込んだ。

火花が散り、刃が反る

だが 折れない。

金棒は自らの勢いを止める事が出来ずに、刃の上を火花を散らして滑り降り、地面を陥没させる一撃を大地に打ち込んだ。

受ける、のではなく受け流す。これが華蝶仮面の選択だった。

華蝶仮面の足は、すでに大地を蹴って天地逆さまに跳ね上がっている。羽根でも生えているのかと錯覚するほどに華麗に舞った彼は、着地した次の瞬間には、再び空へと舞い上がっていた。

当然刃は青牛角に向けられている。

しかし青牛角は地面にめり込んだ金棒を剛力で引き抜くと、宙に浮いたままの華蝶仮面に強引に叩きつけた。

華蝶仮面の双剣と青牛角の金棒が交差する。

華蝶仮面は着地し、ガクリと膝をつく。

青牛角は振り返ってニヤリと笑った。

沈黙が訪れ　そして

「…………ぐはあっ」

崩れ落ちたのは青牛角のほうだった。

『下駄の鼻緒が切れましたね。』

華蝶仮面は何事もなかったように立ち上がると、鼻緒の切れた下駄をポイと投げ捨てる。

それから顔色一つ変えることなく、用心棒たちを睥睨した

『次は誰ですか？それともたった一人の相手に怯みを見せますか？
匪賊は匪賊。群がらなければタダのグズですか。そういうことではないんですか？』

華蝶仮面の挑発に、用心棒たちは不適に笑う。

「この程度の相手に負けるとは……我ら一六衆の面汚しめ」

「……ククク。ヤツなど我らの中でも一番の小物」

「次は誰が行く？飛燕か？雷公か？浮雲か？于毒か？まさか張白騎
というわけにはいくまい。ククク……」

「たああああああっ！！」

「「「「「へ？」「」「」」」」

用心棒たちが掛け声に振り向いたとき、華蝶仮面は彼らの眼前にいた。

『ちょ、一号!?!』

「まだこちらは準備が……」

「そちらの都合など知らん!我が槍捌き、目に焼き付けよ!」

『待つことができないんですか?あなたは?』

怒濤の連続攻撃

振るう槍の速さは疾風にして迅雷。

振るう剣の速さは一瞬にして軌跡を残し、

槍がもたらす一閃の衝撃は太刀風などと呼べるものではなく、まさに爆風だった。

剣がもたらす一太刀は旋風などではなく、竜巻だった。

ゆえにその前に立つ者は木の葉のようにあおられ、哀れに宙を舞う以外なすべがない。

それで 戦いは終わった。

「アニキ！華蝶仮面がこっちに来ますぜ！」

「なんだと！？高い金払わせておいて時間稼ぎもできねえのか、奴らは！」

砦の中にはもう三人しか残っていなかった。

砦の外の黄巾党は、もう誰一人逃げられはしないだろう。

完敗だった。もう一度、同様の仕事を始めるには、さらに大きな労力を必要とするに違いない。不甲斐ない用心棒たちに毒つきながら、アニキはデクに運ばせていた一抱えもあるカラクリを、その場にするすよう、指示した。

それはこの世界風に説明するなら、玩具の水車を積んだ荷車に細長い筒を取り付けたような姿をしていた。

水車が霧を発生させ、霧で覆われた空間に、筒の先から放射される映像を写し出すというものだ。その映像は実際の風景を覆い隠し、現実と虚実を混乱させるほど精密な景色を作り出すのだ。

「どうするんです、アニキ？」

「その《映像投影装置》の幻を使って砦の入り口を隠せ！それから飛び上がれないように城壁を高く見せろ！奴らが右往左往している間になんとか逃げるぞ！」

「わ、わかりやした！」

「わかったんだな」

デクとチビは二人がかりでカラクリを起動させる。借り物ではあったが、仕事のたびに何度も動かしてきたおかげで、すんなりと操作は終わったようだ。

砦の矢座間から覗いて見ると華蝶仮面たちは先ほどの勢いはどこへやら、その場に立ち止まってしまっている。

「ははははは！よしよしよし！奴ら混乱してやがる！今のうちに金目のモンをかき集めろ！さっさと逃げるぞ！」

「「ヘイツ！」」

装置を固定した二人はこれまでの商売で貯めた金品を納めた貯蔵庫に駆け出すことにした。

が、その足がいきなり鈍る。

「……奴ら、何してやがるんだ？」

二人が足を止めたのと矢座間から華蝶仮面を覗いていたアニキが言葉に詰まったのは同じ理由だった。

カキン。

カキン。

金属で石を叩く音が響いてくる。

「は……ははっ。馬鹿なヤツらめ。入れないことを知って、入り口を作ろうとしているようだな」

アニキは嘲笑しつつ、汗を拭った。

なんの汗なのか。おそらくアニキ自身も無意識に気づいていたのかもしれない。

「幻覚といっても、そもそも砦は石造り。そう簡単に壊せるものか……」

アニキが自分に言い聞かせるように呟いた。

次の瞬間、デクが転び、チビがふらつく。

「今、揺れたんだな？地震かもしれないんだな？」

「バ、バカなことを言うんじゃないやねえっ！この辺で地震なんて……あるわけ……ないだろ……。なあ……」

チビの声が徐々に小さくなっていく。

「だって……」

「だってじゃ……！」

言い終わる前に床が大きく振動し、一気に傾いた。

「うおおっ！ア、アニキッ！」

「も、もしかして、や、奴らの仕業……？」

チビとデクが砦の外を覗き続けているアニキに詰め寄る。信じたくないが、もうそれしか考えられなかった。

「……ありえねえ」

アニキは茫然自失状態で呟き続ける。

「槍とか剣つてのは、人を相手にする時に使うモンだ……だったら……なんで……」

甲高い金属音は、いつの間にか、鈍い掘削音に変わっていた。

「なんで人の力で皆まるごと、ぶっ壊せるんだあああああああ
あつつ!!」

「星雲神妙撃!」

『鳳凰煉獄刃!』

一号二号の声が響く。

連続攻撃は砦の外壁を削り、石壁をつらぬいた槍の穂先は、内装の木組みまでも粉碎していた。

城壁内部に槍の尖端が届かずとも、猛烈な勢いで突き崩された石組は、周辺を巻き込んで土煙と共に自壊していく。

土台は皆自身の重みによって崩壊し、ぐらぐらと、足下を揺らしていた。

「『てええいいいいいいつつ！！』」

そして、まさに槍そのものと化した華蝶仮面は、ありとあらゆる材質を突き通し、三人組の待機していた頂上階すらも突き抜け、天井を通り抜けていく。

「ア、アニツ、アニキツ！い、い、い……」

「い、今、華蝶仮面が床から飛び出して来たんだな……」

「天井が崩れ……る……のか？」

亀裂音が響く。

その音は、次第に部屋全体を覆い、やがて砦全体をも覆った。

「に……に……に……逃げっ……！」

崩壊は時間の問題。もう誰も異論を挟むつもりはなかった

「私もいるわよおおおおおんっ！」

紐ぱんの巨漢が、華蝶仮面一号二号の開けた穴をスポーンと通り抜けていく。

その巨体は、一号二号が作ったものよりも大きな穴を床にも天井にも開け、内にも外にも破片を撒き散らす。

その二連撃によって、砦の耐久力は零になった。

崩壊である。

第4章 モブキャラには結構可愛い娘たまにいますよね（後書き）

今日はあと2、3回投稿します。

第5章 お酒は二十歳になってから（前書き）

第1部完結

次は第2部だあ

『ご主人様、次は第2部らしいですよ』

「早いな、こんな調子で書けるのか？」

『無理』

グサッ

クッ……………頑張るもん？

第5章 お酒は二十歳になってから

「「「ぎゃああああああああああああつ！」「」」

三人は悲鳴をあげながら、足下の崩れた床に沈んでいった。

《映像投影装置》も同様だ。

だが、悲鳴や《装置》の破壊音は、砦の大きな崩壊の音に掻き消されていく。

「『美しく咲くこと叶わぬなら、せめて美しく散るがいい』」

映像は消え、空に飛び出したはずの華蝶仮面は、瓦解した砦の上に立っていた。

そして決め台詞らしい一言を、瓦礫に埋もれたものたちに捧げる。

次の瞬間、瓦礫が崩れた。

「あああああつつ！！」

華蝶仮面の足下、瓦礫の中から飛び出してきたのは、アニキだった。

「宝刀《黄龍缶切刀》！一太刀も浴びせることなく、やられてたまるかあああつ！」

手には刀。自力で脱出するとは思いつかなかった華蝶仮面は、完全に不意を突かれる格好であった。

アニキの一降りが、二号の長い袖に傷を入れる。その顔には愉悦の笑みが浮かんでいた。

「俺をなめるなよ！」

『ああ！一号から貰った服が！』

二号はそついうとアニキをにらみつける。

アニキは二の太刀を放った。

そこに二号はいなかった。

刀を戻そうと力を腕に込めた。

が、

動かなかった。

手元を見ていた目を上に向ける。

刀の上に 二号が立っていた。

『許さないよ。』

アニキの両眼に双剣の切先が映る

「ひ、ひ、ひ、ひいひいひいひいっつ！！」

『極彩に散れ！鳳凰煉獄刃！！』

今度こそ、戦いは終わった。

エピソード

軽食喫茶《胡蝶》

そこは成都の一角に親切された、知る人ぞ知る喫茶店であった。

そして天の遣いとして、また北郷の王として人気を集めている北郷
一刀の行きつけの店でもある。

「ちわ！」

店の出入り口に取り付けられたベルをならしながら、一刀は店内に
足を踏み入れた。

「あ、いらっしやいませ、ご主人様」

カウンターの向こうで陶器の碗を磨いていた少女が一刀の顔を見かけ、ぱあっと表情を輝かせる。

ちなみに彼女こそがこの店の主であり　この国の軍師、諸葛亮であつた。

「朱里。お茶をもらえるかい？」

「はい。お待ちください」

《真名》で呼びかけると、諸葛亮は熊のプリントのエプロンを翻して、小走りに店の奥に駆けていく。

「それから……いたいた。おーい、星、翡翠」

店の奥でメンマ丼をパクついていた趙雲とそれを呆れ顔で見ていた姜維は、今初めていることに気づいたかの様に一刀を見返した。

「おや、主。主も食事ですかな。」

『それともサボリですか？ご主人様。』

「違うぞ翡翠！食事だよ。人身売買事件を解決してもらったことだし、お礼をかねて食事に誘おうと思ったんだけど……ちょっと遅かったかい？」

「事件を解決したのは主たちであって、私たちではないですぞ？私は囿の役目も果たせずにオロオロとしていただけ。礼を言われる筋合いはないですな」

『僕はそんな星を見張っていただけですから』

趙雲と姜維はすました笑顔で一刀の瞳を見つめた。

「だって華蝶仮面として……」

言いかけてやめる。

つまりこの事件は、華蝶仮面が解決したことになっているらしい。

「じゃあそついうのに関係なく今日は奢らせてくれよ」

「ふむ……好意ということであれば、素直に受け取ることにはいたしますか。」

姜維は朱里に注文をする。

『師匠！僕は師匠オススメランチ。』

「では、私は見せにあるだけの酒とメンマを持ってきてもらおうか」

「ちょ……！？」

「冗談だ、主」

趙雲の笑えないジョークに、一刀の頬がピクピク引きつる。

「ああ、そうそう。ひとつ訂正しておきますが……主が一人で逃げ出しておれば、華蝶飯面とやらが本腰をいれることも、二号が砦を目指すこともなかったはず。民のことを考え続けた主の手柄であることも、心に留めておいてよいと思いますぞ」

「そうかな？」

『そうですね。自らの命が危険にさらされているのに他の民のことを考えることができるのは、凄いことですから。』

一刀の反応に姜維は失笑する。

と、客の来店を知らせるベルが、軽快な音を立て続けに鳴らした。

一刀を追って彼の臣下たちがこぞって押しかけてきたようだ

『慕われていますね。ご主人様』

「そつだな翡翠。よし、ついでに宴会でもするか」

昨日の今日で元気なことだ、と趙雲は思う

「はあゝ。困った我が君ですね」

隣では、戻ってきた諸葛亮が、心配そうに、けれど楽しそうに微笑んでいる。

『まあ、だからこそ、楽しいんですけどね。』

趙雲は答えず、諸葛亮の持ってきた酒を、姜維にも渡して黙って飲み干すのだった。

第5章 お酒は二十歳になってから（後書き）

次回予告！

はわわ、ご主人様！たいへんです！

璃々ちゃんたちの通う寺子屋に、袁紹さん、文醜さん、顔良さんたちが立て籠ってしまいました！

しかも追い詰められた袁紹さんたちが持ち出してきたのは……

ええーっ！？

巨大ロボットですかぁ！？

でも任せてください！

こんなこともあるつかと、こっちだって翡翠ちゃんと準備しちゃいました！

次回《恋姫無双外伝》

く華蝶仮面と愉快な仲間？く

第二章

《発進せよ、華蝶ロボ！》

正義の華を咲かせるために、美々しき蝶が悪を討っちゃいます！

『師匠のテンション高いな』

番外編 翡翠と愉快なご主人様？（前書き）

書きたくなった！

今はこれっぽっちも後悔していない

今はね………

「怖いこと言っなあ！ 緋翠」

番外編 翡翠と愉快なご主人様？

恋姫の日常

桃香「翡翠君〜！」

翡翠「何ですか桃香殿？」

桃香「呼びすてで良いのに。」

翡翠「いえ、はじめはつけないと。」

桃香「最近愛紗ちゃんに似てきたね。」

翡翠「そうですか？」

星「そうだな。」

翡翠「ビクッ！星、後ろに現れないでくださいよ。」

桃香「だよね、似てきたよね！」

星「ええ、確かに。」

翡翠「そうですか、それじゃあ仕事をしましょうか桃香様。」

桃香「え、いやだよ〜助けて星ちゃん。」

星「すいませんが桃香殿、私には無理です。」

桃香「いや~~~~」

普段

愛紗「翡翠〜？どこだ〜？居たら返事をしろ〜」

星「なにをしておるんだ？愛紗」

愛紗「ああ、翡翠がまだ仕事も終わって無いのに部屋に居ないんだ。
」

星「そうか、頑張れ」

桃香「愛紗ちゃん翡翠君ならあつちで見たよ。」

愛紗「ありがとうございます。桃香様」

走ってその場所にいく愛紗

星「さて、あの状態の翡翠を愛紗が連れて行けるのだろうか？」

桃香「どうだろうね。」

愛紗「あ、居た！翡翠……………」

翡翠「zzzz……………」

木の下に丸くなって寝ている翡翠

愛紗「ああ、……………」

そのまま固まった愛紗

結局翡翠が起きるまで固まったままの愛紗なのでした
仕事

一刀「平和だな。」

桃香「そうだねえ。」

愛紗「……………」

一刀「こんなけ平和だと、外に行きたくなるな。」

桃香「行きたいねえ。」

愛紗「……………」

一刀「翡翠が嬉しそうに朱里とお茶をしてるな。」

桃香「してるねえ。」

愛紗「……………」ご主人様。」

一刀「なんだい？愛紗」

愛紗「仕事をちゃんとしてください」

桃香「だって、仕事飽きた〜。」

愛紗「い・い・か・ら！」

「「は、はい！」」

平和な日常でした

番外編 翡翠と愉快なご主人様？（後書き）

これからもこんな感じのを書いていくと思います

番外編 ご主人様の日常……… ってのは全く関係ない(前書き)

連続だね

番外編 ご主人様の日常……… ってのは全く関係ない

今日は珍しく休暇が貰えました。

『何をしましょうかね?』

「なら、私と試合をしないか?」

星、急に現れないでくださいよ。

「それは悪かった。」

『って、何で貴女は人の心を勝手に読むんですか』

「イヤ、お主の場合顔に出ている。」

この人は……

もうどうしようも無いですね。

「それについては否定できんな。」

『だから、読まないでくださいよ。』

「分かった、分かった。で、私との試合はどうだ？」

『星、僕は文官なんですよ。武将じゃないんですから試合なんか挑まないでくださいよ。』

僕がそう言つと星は、顎に手をあて、また考えはじめ

「そう言われてしまつとな……………うーん、では主の観察をしたらどうだ？」

『ご主人様の？』

意味がわからず首を傾げる

「ああ、今日一日、主の仕事っぷりを観察するのだ！」

『…………さて、お茶でも飲みましょうかね。』

呆れてもう無視をする事に決めた翡翠

しかし星は

「そう言えば今日は曹操殿が主の部屋に手伝いに行くと聞いていたな。」

『本当ですか！？星。』

「あ、ああ。」

『こつしちゃ居られない』

お茶をいれるのを止め、一刀の部屋に走って行く。

「曹操殿の名前だすとなぜあんなに変わるんだ？」

『ご主人様！』

ノックもせずに一刀の部屋に入ると、

「な！翡翠／＼／／」

師匠を抱き締めている一刀がいた。

『……………』

「……………」

三人に沈黙が流れる。

『あゝ、えっと……………お邪魔しました!』

走って部屋を出る翡翠

「待て翡翠、誤解だあああ!」

遠くから僕を呼ぶ声が聞こえたが無視だ。

それから少し走っていると中庭に出た

『走りすぎて疲れたな』

そう言って木の根元の部分に寝転がる。

しばらく目を瞑っていると

「あら、翡翠じゃない？何をしているの？」

曹操殿が現れた。

『華琳様！……いえ、ただ見たく無いものを見てしまったので、走って逃げてきました。』

「それで疲れて横になっていた……そう言いたいのか？」

『はい。』

そうすると華琳は翡翠のすぐ横に来て座った。

「ほら、ここに来なさい。」

『え？』

華琳は座って膝を指しながら言った

「膝枕してあげるわ。」

『いえ、そんな、恐れ多い事。僕には無理です。／＼／＼』

「良いから、せつかく私がしてあげると言っているのだから大人しく聞きなさい。」

『では、失礼して…………／＼／＼』

頭を華琳の太ももの上に乗っけ、横になる

「少し休みなさい。」

華琳のその言葉に従ったのか、目を瞑り寝息をたてはじめた。

「ようやく寝たか。」

星が木の上から現れた。

「趙雲、貴女ぐらいよ。この魏の霸王に膝枕をしてやってくれなんて頼むのは」

「仕方なかるう。最近の翡翠は休む事をしないのだ。曹操殿に頼めば休ましてくれるかと思つてな」

そう言つて翡翠を見ながら星は言う

「ま、ここまで導くのに主には犠牲になつてもらつたがな。」

「まあ良いわ。ほら、翡翠が起きてしまふかもしれないからあつちに行きなさい。私もこの時間を楽しみたいのよ。」

「分かりました。でも頼むのは今回限りですからな。次は私がどうにかしますゆえ。」

そう言っつて趙雲は去つてゆく。

「……………クスッ、期待しないで待ってるわ。まあ、譲つてあげる気は無いけどね。」

そのまま日が暮れるまで膝枕は続いた

番外編 ご主人様の日常…………… ってのは全く関係ない(後書き)

感想やアドバイス、または誤字などが有りましたら教えて下さい

「ではまた今度」

『ご主人様？さっき師匠に何してましたか？』

「(ゾクッ) き、気にしない、気にしない」

『待ちなさい！』

番外編 白連は可愛いと思う（前書き）

白連は可愛いと思う

うん、あの残念な所とか

番外編 白連は可愛いと思う

『平和ですね、師匠たち。』

「そうだね、翡翠ちゃん」

「あわわ、余り師匠とか言わないでください。」

「まだ雛里ちゃん慣れないの？私は慣れたよ。ね、翡翠ちゃん」

『そうですね師匠。しかし、ちゃんづけはちょっと……』

え？僕たちが今何してるかだつて？

決まってるじゃないか。

朱里師匠と雛里師匠との三人でお茶を飲んでいるのだ。

『師匠、とてつもなく関係無いことを聞きたいのですが。』

「なあに？翡翠ちゃん」

『（……………ちゃんづけ？）彼処にある師匠の机の上に置いてある書簡はなんですか？』

「あれはご主人様に渡しに行く書簡ですよ。」

「朱里ちゃんはご主人様の仕事をちよつと手伝ってるんだよ。」

『へえ。』

ご主人様は仕事も一人ではできない人だからな。

『じゃあ代わりに僕が届けに行きますよ。』

「はわわ、良いの？」

『ええ、それぐらいは。』

そう言って僕は書簡を持ってご主人様の部屋に行く

コンコン

「はあい」

中から桃香様の声が聞こえたので部屋に入る

『失礼します。ご主人様、これ師匠からの書簡です。』

「朱里からの！ありがたい。」

『ありがたい？仕事が増えたから、逆に迷惑なんじゃ……』

「終わってるんだよ。」

『ハア！もしかして、その書簡を師匠にやらしたんですか？一刀』

「い、イヤー、一人じゃできなさそうで、手伝ってもらったんだ。」

僕が珍しく下の名前で呼んであげると怯えたように理由を話す一刀

『やだなあ、怒りはしませんよ。』

「え？本当に」

一刀は目を輝かせながら聞いてきた。

『はい、「ヤッター！」愛紗さんに報告するだけですから。』

「そんな殺生なあ。」

傍目からでもわかるほど落ち込んだ。

『はあ、今回だけですからね。』

そう言つと一刀は抱きついてきた

「ありがとう翡翠、愛してる」

『なっ……………！！／／／／』

「良いなあ翡翠ちゃん、ご主人様にそんなこと言われて。」

『何を言いますか桃香様！！／／／とりあえず離れてくださいご主人様！！』

「ちえ、まあ良い。っと忘れてた。翡翠、白連が呼んでたぞ。」

『白連殿が？』

「ああ。」

『ふうん、わかりました行ってきます。』

そうしてご主人様の部屋を出た

さて、白連殿の部屋についたはいいが

『何、この惨状？』

「おお！来てくれたか翡翠」

『今全力で部屋に帰りたい気分です。』

どんな状況かと言うと……
子どもたちがたくさんいる。
洗濯物がぐちゃぐちゃ

『白連殿の子どもですか？』

「そんなわけあるか！！」

『じゃあ一体なんなんですか？』

そう聞くと白連は顔を俯き、良いはじめる

「実は、孤児たちをここで引き取って勉強させようってご主人様が
いったんだ。」

『良いことじゃないですか。』

「それで、その責任者に私が任命された。」

『おめでとございます。』

「だが、これぐらいの子どもたちの接し方が分かんないからお前を呼んだんだ。」

白連は説明を終えて顔をあげる

『わかりました。では、まず白連殿はこの洗濯物で遊んでいる子どもたちを一ヶ所にまとめて連れて行って下さい。』

「分かった。」

そうして指示に従う白連

（まったく、最初はやる気無かったんですがねえ。保護欲にかられる人ですね。）

そう言って散らかった洗濯物をたたみはじめる。

少しすると白連が帰ってくる

「次は何をすれば良い？って何をしているんだ／＼／＼」

『何って、洗濯物をたたんでるんですけど。』

「や、ヤメロ！こつ恥ずかしいだろ！／＼／＼」

そうして白連が飛びついてきて急な事だったため、姿勢を崩す。

「『うわぁっ！』」

そして、唇同士が触れる

「『……………／＼／＼』」

そして沈黙が訪れる

『白連殿、その退いてくれませんか？／／／／』

「ご、ごメン！／／／／」

また沈黙が流れる

「お前は嫌じゃ無かったか？」

『え？』

「だから、私とのキスは嫌じゃ無かったかつて。」

『フフ、嫌だっただけです今ここには居ませんよ。白連殿は？』

「わ、私は……………別に……………／／／／」

顔を赤らめながら答える白連

そんな白連に我慢できなくなったのか、

何時の間にか僕は白連を抱きしめていた。

「……………」

無言で抱き締め返してくれる。

それから僕たちは、深い深いキスをした。

番外編 白連は可愛いと思う（後書き）

これは番外編です。

設定とか時間列は全く関係ありません。

第2部 1章いろんな意味で星は凄いと思う（前書き）

第2部 スタート！

『うるさい！』

「まあ落ち着けよ翡翠」

「ご主人様？」

ゾクッ「あ、愛紗？」

「こんなところで仕事サボらないでくださいね」

「ひ、翡翠助けて！！」

『うるさい！』

「俺も！？」

第2部 1章いろんな意味で星は凄いと思う

靄に覆われた崖を、人影が駆け登っていた。

崖は砂と岩のみで構成された岩山の一部であり、中腹に雲を置くほどの高山である。

しかもその形状は、如何なる生物も近づけまいとするような、天に向かつて垂直にそびえ立つものであった。

けれどその人物は落下の恐怖を微塵も感じていないのか、あるいは重力の戒めから逃れているのか、軽々と山頂付近に到達しようとしている。

だが山は無慈悲であった。

まるで人がこの地に侵入することをよしとしないように彼女そう、その人物は女性であった　　が踏破のために引き起こした震動を利用し、ギリギリのところまでバランスを取っていた巨岩を落下させたのだ。

「ハアッ！」

あわやという瞬間、女はそれに気づき、飛んだ。

巨岩を踏み台にして、さらに山頂に向かって飛ぶ。

だが巨岩が引き起こした震動は、さらに三つの巨岩を転がした。しかもそのすべてが、まるで意思を持っているかのように女の命を狙う。

「破アアアッ！」

蹴る！蹴る！蹴る！

女はそれら巨岩さえも足場に変え、垂直に岩壁を登っていった。

指先がその跳躍で山頂に到達する。

女は全体重を支える指に力を込め、肘をバネのように屈伸させて、山頂に飛んだ。

「ふう」

さすがの女性も緊張を解いて息をつく。

目元を飾る蝶の仮面の奥に光る瞳にも、心なしか疲れが見えるようであった。

もはや改めて語るまでもない。

彼女こそ蝶仮面の列婦

華蝶仮面である。

「やて……」

華蝶仮面は、いきを整えると、靄に包まれた禿げ山の山頂を眺めた。

草木や生物の気配はなく、靄に覆い隠された無骨な岩肌が露出しているのが見える。

ただ唯一、中央部には巨木が一本突き立っていた。

それは雲さえも足下に置く山頂にあつて、さらに天に向かってそそり立ち、見上げてなお、先端を靄の中に覆い隠すほどに巨大であった。

華蝶仮面は、疲れなどすでにないと言わんばかりに、堂々と巨木に近づく。

「これが馬鉄殿の若気の至りか。なかなか傾いたものを作ってくれたものだ」

華蝶仮面が手を触れる。

と、巨木にまとわりついていた結露が、彼女の指を伝って地面に落ちた。

天の気まぐれか。

その時、ざあっと、風が吹いた。

靄に隠されていた巨木が、初めて全貌を見せる。

幹に彫り込まれた見事な意匠。

明らかに人工物であることを示す金属の輝き。

もはやそれを巨木であると信じる者はいないだろう。

それは 槍であつた。

あまりにも巨大な一本の槍であつた

その巨大さたるや、とても人が扱えるものではない。

これを作った者は、誰が使うことを想定していたのだろうか？

だが華蝶仮面は迷いもなく、一人では抱き抱えることすら叶わない
槍の柄に取り付いて上向きに力を込めた。

「華蝶炉坊の武器として、しかと受け取った！」

ミシリ、と地面が抉れ、槍の天頂部がグラグラと揺れる。

「ぬんっ!!」

列帛の気合いと共に、槍にはさらに力が加えられていく。やがて槍
は、ミシリ、ミシリ、と何度も音を立て、大地の亀裂をさらにおお
きくし

山頂に突き立っていた槍の刃部分を、完全に露出させた。

「はあああああっっっ！」

槍が、抜ける

だがその瞬間、槍を突き刺していた足下部分の亀裂が、一挙に大きく広がった。

同時に、山頂のあちこちから、石の割れる音が幾度なく聞こえ始める。

巨大な槍が突き立つことによってバランスを保っていた山が、その焼失に伴い、崩壊を始めたのだ。

「やれやれ。まさかこういうことになるうとはな」

逃げようにもここは周囲に何もない山頂。

槍の重みで駆け降りることができないのならば、崩れるに身をまかせる他ない。

もしくは槍を捨てるかだ。

一瞬の逡巡。それが華蝶仮面の命運を分けた。

足下が崩れ、山は華蝶仮面と槍を呑み込んでいく。

「貂蟬、朱里、主、そして翡翠。私は必ず生きて帰る……必ずだ！」

それは辞世の句なのか。

華蝶仮面は、檣と共に土煙を巻き上げる山頂に消えたのだった。

第2章金髪お嬢は大抵賢いかバカしか居ない…………… ような気がする（前書き）

「第2章金髪お嬢は大抵賢いかバカしか居ないような気がするスタート」

「一刀……………それは華琳様に対する挑戦か？」

「なにいつてるんだ華琳はバカじゃなくて賢い方だろ」

「……………ならいい」

第2章金髪お嬢は大抵賢いかバカしか居ない…… ような気がする

数日前

「おーほっほっほっほ！ざまあないですわね！」

成都是未曾有の危機に瀕していた。

北郷一刀の発案で作られた寺小屋が、教師に変装して潜入していた袁紹、文醜、顔良の三人組にジャックされたのである。

「麗羽さま、そんなところから顔を出したら危ないですよ」

「姫」。実際、追い詰められているの、あたいたちなんだけど、わかってる？」

首謀者である袁紹に付き従うのは、かねてから彼女の臣下であった顔良と文醜である。

一刀たちが袁紹と出会ったのは、董卓を討伐するために作られた連

合軍だった。

一刀たちは袁紹の無茶苦茶な指揮に振り回されこそのものの、董卓討伐後は連合軍も解散、しばらくは再開することもなかった。

しかし袁紹が己の領土を拡げるために、一刀が県令として統治していた幽州琢県に攻め込んできたことから、結果として返り討ちにすることになったのである。

領地を失った袁紹たちは、黄金郷を目指して珍道中を続けているとも、別の大陸に渡って素性を偽り三姉妹怪盗になったとも、悪名高くないならず者になったとも言われていた。どうやら正解は、ならず者であつたらしい。

文醜と顔良は妙に上機嫌な袁紹を窓のそばから引き離し、今や彼女たちにとっての命綱である人質の幼児の監視を強めているようだった。

「まいったな」

『まったくです』

北郷一刀と翡翠は、寺小屋を包囲する兵士たちの中で、苦悩の表情を浮かべていた。

「なんとかならないか翡翠」

『なるならどうにかしてますよご主人様』

常識的に考えれば、王である一刀がこんな現場に出ることなどあり得ない。

だが一刀の忠臣であり、五虎將軍の一人でもある黄忠の娘、璃々が人質に含まれていると聞き、彼自身いてもたってもいられなくなつて、思わず現場に駆け付けてしまったのだ。

「ご主人様。ご迷惑をおかけしてしまつて……」

『やはり袁紹をあの時に徹底的に潰しておくべきでしたね……』

本来、内政を担当しているはずの黄忠と姜維も、一刀同様、今や弓と双剣を手に現場を訪れていた。

いつもは二人とも柔和な笑みを浮かべているその顔に、今は深い苦悩が刻まれている。それを見た一刀は頭をガリガリと掻きむしって、寺小屋の窓を睨んだ。

「紫宛のせいじゃないさ。だけど……人質が子供たちばかりだと、前の時みたいなの作戦も使えないな」

『はい。長期戦は覚悟しなくてはならないのですが……そうになると璃々ちゃんや他の子供たちが、どれだけ頑張れるかということになると思うのですが……』

「大丈夫です。璃々は強い娘ですから……他のみんなを勇気づけるくらいのことはしてくれるはずです」

言葉とは裏腹に、黄忠の眉宇は泣き顔のように歪んでいる。一刀は唇をかみしめた。

（翡翠がここにいてことは華蝶仮面もどうにもならないってことか……クソッどうにかならないのか）

その時だ。

「あつ、あれは!？」

声をあげたのは、兵士たちに寺小屋を包囲させていた五虎將軍の一人、馬超であつた。

その指さす方向に一刀は視線を向ける。

見覚えのあるシルエットが、寺小屋の上に立っていた。

「美と正義の使者、華蝶仮面……推参！」

『……………』

驚く一刀たちを尻目に、華蝶仮面は屋根から飛び降り、木窓を槍でぶち破っていた。

人質の安全を最優先し、慎重論を唱えていた一刀たちはその無謀な行動に、思わず制止の声をあげる。

だが、華蝶仮面は止まらなかった。

『まったく……あの人は！』

「顔良さん、文醜さん！なにか来ましたわよ！」

当然寺小屋の中からは、悲鳴混じりの怒鳴り声が聞こえてくる。

続けて刀の打ち合う金属音。中で戦闘が始まっているようだった。

『馬超隊は人質の救出を優先してください。紫苑殿は僕と一緒に突入しますよ。』

翡翠が状況にあわせて的確に指示を出す。

「わ、わかった。」

馬超はすぐ命令をだし、受けた兵士たちは、寺小屋の入り口に殺到していく。

その途端、

寺小屋の入り口は内側から開かれた。最初に璃々が飛び出し、中の子供たちを外に誘導する。

兵士たちは人質の自力での脱出に面食らいはしたものの、すぐに追撃者への警戒と子供たちの適切な保護に切り替えていった。

幸いにして怪我人はいないらしく、遠目に眺めていた観衆たちからも安堵の声が漏れる。

入り口が開かれたことによって、中で起こっている戦闘音が大きく聞こえ始めていた。

剣戟に打撃音が交じり、やがてなにかが割れる音が響き始める。

「星雲神妙撃！」

だが最後に聞こえてきたのは、華蝶仮面の声だった。

槍を構えた華蝶仮面が、轟音と共に天井をぶち破って飛び出したのだ。

「いやあああああああ！」

続けて、噴水の水に押し上げられるように、袁紹、顔良、文醜の三人が屋根から放り出される。三人は、そのまま屋根を転がり、ぼてぼてと地面に落下していった。

「美しく咲くこと叶わぬなら、せめて美しく散るがいい」

華蝶仮面の決め台詞に、観衆から喝采が上がる。

だが歓声に交じって、誰よりも大きく怒鳴り声が飛んだ。

馬超だ

「おい、おまえ。あんな真似して人質に何かあったらどうするつもりだったんだ！」

『翠殿？』

屋根の上に佇む華蝶仮面を指さし、馬超は怒鳴り続ける。しかし華蝶仮面は、馬超の怒りなどまったく意に介さないように、平然と鼻を鳴らした。

「何かする前に片付けたではないか」

『おい翠殿』

さつきから翡翠が呼び掛けているが無視である

「それは結果論じゃねえか！」

「それ『翠殿！』」

華蝶仮面の言葉を遮り翡翠が怒鳴る

「な、なんだよ翡翠」

『華蝶仮面に構う暇があるのなら早く隊を率いて袁紹を追いなさい！逃がしたら食事の量を減らします！』

「なにいつ！？」

翡翠の指摘で、馬超は袁紹たちを追いかける兵士たちに目を向ける。兵士たちは殿を勤める文醜の奮闘で、思っような追跡ができなくなっているようだった。

『貴女の部下たちは困っているようですが？』

涼しげな目で翡翠に見られ、馬超は顔を真っ赤にして拳を振り上げた。

「く……く……く……！お、お前、これで許したと思うなよっ！こらあつ、抵抗すんな、テメエ！これ以上、無駄に手間をかけさせるなら、あたしの槍が相手になるぞ！」

潮が引くように、馬超の大声が遠くに消え去っていく。

騒音の主がいなくなったことで、観衆たちも騒動が終わったことを悟り、それぞれ自らの生活に戻っていった。

残ったのは寺小屋関係者と一部の兵士、そして一刀、黄忠、姜維、璃々、華蝶仮面の十数名だけである。

「平和を愛するもの同士。縁があればまた会うこともあるだろう。では、さら……」

「あ、待ってくれ華蝶仮面」

ふいの一刀の呼びかけ。

華蝶仮面は、その一言が決して逆らえぬ命令であるように、跳躍寸前で足を止めた。

「……誰かと思えば以前の勇敢な青年ではないか。妙なところで会

うものだな。今日は二号は居ないぞ。」

とぼけているのか、華蝶仮面は一刀の顔を見るなりにそう言った。

一刀はそんな反応も想定していたかのように、その場で華蝶仮面に静かに話しかける。

「さつき翠が言っていたことだけども。俺も気をつけた方がいいと思うぞ。今回は仲間も居ないんだろ？」

一刀の言葉に華蝶仮面は困ったように立ちつくす。

「し、しかし青年。ああいう場合は時間をかけるとかえってだな……」

『だとしても今回の貴女の行動は、早すぎます。せめて仲間をつれているならまだしも』

翡翠が拗ねたように言い

「うん。間違いだったとも思わないよ。でも人質の状況くらいは確認しておかないと」

「……そうか。青年と少女がそう言うならば、以後は気をつけることにしよう。」

『なんだって?』

「わあ!ありがとう」

翡翠が少女と言われて怒りそうだったので大袈裟に頭を下げる一刀

すると照れ隠しなのかプイツと横を向いた。

「ではわたくしからも、お礼を言わせていただきますわね。ありがとう」

声が聞こえた。華蝶仮面は再び視線を階下に下ろす。

華蝶仮面と一刀の間に割り入ったのは、黄忠であった。傍らには璃々

その表情に憂いはなく、いつもの穏やかな笑顔が浮かんでいた。

「お姉ちゃん、ありがとう!」

璃々の無邪気な感謝の言葉には、さすがの華蝶仮面もくすぐったさを隠せない。

「せ、正義のためだ。気にするな。」

『素直じゃ無いですね。』

「う、うるさい。では、さらばだっ！」

華蝶仮面は屋根の上を跳躍し、いずこかへと姿を消したのであった。

（やれやれ）

一刀はホッと胸を撫で下ろす。

かくて一つの事件が幕を閉じた。

というわけには、いかなかった。

第3章 クツ、こんなところで負けられない（前書き）

「巨大ロボが現れた!？」

『はい』

「クツ、こんなところで負けられない」

「主……………翡翠と何をやっているのですか？」

「『……………前ふり』」

「……………」

はいスタート!!

第3章 クツ、こんなところで負けられない

「やれやれ、じゃありませんわ！文醜さん、顔良さん！」

それからわずか数時間の後、荒野には成都を追われた三人組の姿があった。

「そんなこと言ってもさあ、あんなのあたいたちだけでどうにかなるわけないじゃん」

「そうですよ、麗羽さま。無事に逃げられただけでもよかったと思いますしょうよ」

いまだ怒りを冷めやらぬといった袁紹を、文醜と顔良はなだめすかして歩き続ける。目的地は特に定めていない。

とにかく今は成都から離れ、追っ手を引き離すことが急務と考えているようだった。

少なくとも、文醜と顔良はそのつもりである。

「逃げたのではありませんわ！わたくしは勝ちを譲ってやったんですよ。そこ、間違えなくてくださいましね！」

「わかりました。さ、とにかくさっさと遠くに逃げ……じゃなくて、行きましょう」

気持ちを落ち着かせるように、言葉を選んで返答する顔良。しかし袁紹は、顔良の台詞に、納得のいかない響きを見つけたようであった。

「あの、まだ何かあるんですか？」

「何を言ってますの、顔良さん？このわたくしをあんな無様に吹き飛ばした相手をこのままにしておくはずないでしょう？引き返して自分の罪を、とくと教えてさしあげるに決まっていますわ！」

「えーっ！に、にげましょうよう！」

「お黙りなさい！第一、このまま逃げたら報酬が手に入らないじゃありませんの！せっかくわたくしが見つけてきた仕事ですよ！成功させなければ袁家の恥ですわ！」

袁紹は地団駄を踏むように、顔良を叱り飛ばす。もちろんそんな叱責で恐れを抱く顔良ではないが、気分はワガママな子供を預かった保育士だ。

「その依頼つてのも、なーんか胡散臭いんだよなあ」

文醜がポツリと呟く。もちろん袁紹の地獄耳が、そんな言葉を聞き逃すはずはない。

「そんなことを言うのはこの口ですよ！」

「いひゃい、いひゃい！やえてくらはい、えいはまー！」

文醜の頬が袁紹の両手でぐにーんと伸ばされている。

文醜が反論できなくなったところで、袁紹は手を放し、埃を払うように両手で叩いてみせた。

「まったく……おバカな部下を持つと苦勞が耐えませんわ」

「あ、それより麗羽さま。その依頼人からなにかすごい兵器を預かったんじゃないかもしれませんでしたか？」

「いいところに気づきましたわね、顔良さん！」

「真打ちは最後に登場するものですわよ！今度こそ、あの変な仮面の女に、ギャフンと言わせてあげますわよ！オーホッホッホッ」

「心配だなあ」

「ま、今度はなんとかなるんじゃない？心配しすぎだって」

「文ちゃんと麗羽さまがお気楽すぎるんだよう」

「オーホッホッホッホッホッホッ」

前途多難だよ、と顔良は呟く。

しかし顔良の予想は、珍しく外れることとなる……。

「たいへんよおん、ご主人様あああん！」

軽食喫茶《胡蝶》で夕食を取っていた一刀と翡翠の穏やかな日暮れは、筋肉達磨の来襲によって破壊された。

「うわ、なんか出た！？」

『く、ご主人様、僕の後ろに……』

貂蝉だった。

一刀は彼が《胡蝶》の看板娘だと聞いて仰天したことを覚えている。そう理解していても、いきなり飛び出して来られては心臓に悪い。

「あらあ！オトメに向かって、なんか出たとは失礼ねえ！しかも翡翠ちゃんのご主人様を身を呈して守ってるし。あ、それより街が大変なよう。大きな人形兵器が出現して大変なことになっているの

「よおん！」

「なんだって！？」

『本当ですか！？』

そう聞かされては、いつまでも驚いている場合ではない。

一刀は即座に助けを求めることにする。

もちろん一刀自身も戦う力を持っていないわけではない。しかし現代日本で習得した剣道もこの戦乱の世では兎戯に等しく、心もとなすぎた。

だからこそその援軍要請だ。

「星！一緒に来て……あれっ？」

しかし先ほどまでメンマと酒を楽しんでいた趙雲は、いつの間にか姿を消していた。

尋ねようにも、店主である諸葛亮も、看板娘の貂蝉も、隣にいる姜維も、曖昧に笑みを返すだけだ。

「おい、ご主人様！表が大変なことになってるぞ！」

奇妙な沈黙が発生していた空間に、荒々しい声が響く。

馬超であつた。

どうやら彼女も一刀を捜して《胡蝶》にやってきたらしい。

「翠！？よし！翠、一緒に来てくれ」

外に出ようとしていた一刀は、背後から聞こえてきた物音に足を止めた。おそろおそろ振り返ろうとして……馬超の叫びが彼の予想を決定的にする。

「ああーっ！テメエはっ!？」

「美と正義の使者、華蝶仮面推参！」

背の高い丸椅子の上で直立していたのは、華蝶仮面一号であった。

「悪いがこの戦い、私に任せてもらおう」

「そうはいくかよ！ここで逢ったが百年目だ！こっちはテメエの勝手な行動で迷惑したんだよ！食事の量を減らされたりな！」

『それは翠が悪いのでしょうか？』

「こら、二人とも！喧嘩している場合じゃないだろ！今はその……なんだっけ？」

「巨大人型兵器よおん。ご主人様」

「そう！巨大人型兵器だよ！まずはそれをなんとかしないと！」

一刀の仲裁で一触即発であった馬超の動きが止まる。馬超は怒りの方向を市街の治安を乱す人型兵器に向けることにしたらしく、「うおりあああああつ！」と気合を入れて外に駆け出していった。

「では、私たちも行くか」

華蝶仮面が跳躍し、椅子から降りる。

一刀は頷いて再び外に出ようとした。だが一刀は、もう一度、背後から聞こえた声に足を止めることになった。

「待ってください！こんなこともあるかと、私たちも巨大人型兵器を用意しているんです！」

振り返ると、そこに、青色の蝶仮面をつけた諸葛亮がいた。

「え……………あの、朱里？」

「はい。……………はわわっ、そうじゃなくってわ、私は華蝶仮面四号なんです！」

一刀の動きが停止する。辺りに目をむけると、いつのまにか貂蟬と姜維も赤い蝶仮面と緑の蝶仮面を着けて「二号よん」

『……………二号だ』

といった

「……ええと……朱里……。あ、いや、そうじゃなくて……」

一刀は混乱して思考停止に陥りそうになった頭をどうにか降ると、現実だけを見ることにした。

「つまりこっちにも巨大ロボがあるのか？」

「巨大……炉坊ですか？ええと、天界の言葉は分かりませんけど……たぶんご主人様の想像通りのものだと思います！あ、ご主人様って言っちゃった。失敗、失敗」

あわあわと口元を押さえる諸葛亮を眺めながら、一刀は理解を放棄することにした。

もともと三国志世界の武将が女の子になってしまった世界だ。今さら巨大ロボトが出てきたって驚いたり……

（って、驚くよ！そんなのまでOKなのかこの世界！？あ、いや待て。そっぴや諸葛亮って、木牛流馬や衝車を発明していたような気がするな……つまりそっぴやものとして考えればいいのか……？）

ようやく自分を納得させることのできる解答を見つけた一刀は、話を続ける気力を取り戻し、諸葛亮に説明を続けるよう促す。

「は、はいっ！えーと、えーと、な、名付けて華蝶炉坊です！遠隔で操作する形式になっています！一号さん、これを使って、悪い兵器をやっつけてください！」

「うむ、わかった。準備がいいな、二号」

「えへへ 博士と呼んでくださいね。えっへん！」

諸葛亮が小さな胸を反らす。

『師匠一人の手柄じゃないのに……』

横では姜維が膝を抱えて拗ねている。

「では……華蝶炉坊、出動だ！」

「はいっ！では皆さん、外に出てください！」

一刀と貂蝶と姜維は、諸葛亮に追い出されるように店の外に出る。

次の瞬間、

窓という窓、入り口という入り口にシャッターが下りた。

続けて店は地響きと共に浮上していく。

店の底には、舞台装置のような筒状の足場があり、中に人型巨大兵器が格納されていた。

《がおー！》

スポットライトに照らされた巨大人型兵器　華蝶炉坊は、力こぶを作るように腕を上げ立ち上がる。そして一步を踏み出す。

「……………これ、どうやって動いてるんだ？」

一刀は原理がまったく理解できず、姜維に尋ねた。

すると姜維は諸葛亮が楽しそうに右腕に着けたまるで腕時計のような操作装置を指差す。

『あれで命令して進めるんですよ。』

「どんどん進んでください、華蝶炉坊！」

《がおー！》

諸葛亮の口答での命令を聞き入れ、華蝶炉坊は家と家の間をずんずん進んでいった。

原理について教えてくれそうにないと踏んだ一刀は、華蝶炉坊に目を戻す。

「……まあ、勝てるならなんでもいいか」

『そうですよ。』

「一号さん。戦闘になったら交代してくださいね！」

「任せておけ、博士」

かくして

華蝶炉坊は出撃した。

第3章 クツ、こんなところで負けられない（後書き）

感想やアドバイスを出来れば書いて欲しいです。

『
お願いします
』

第4章浪漫って大切だよね（前書き）

「俺がお前を討つ！」

『一刀、僕は君と戦いたくない。』

「お前の力はただ戦場を混乱させるだけだ。だから帰れと言った」

『撃ちたくない、撃たせないで』

「撃ちたくないと言いながらなんだお前は！」

「……主？今度は翡翠と何をやっているのですか？」

「ガム ムの緋翠の好きなセリフ」

『まあ少しアレンジしてありますがね』

「へへ、俺ってばやっぱり不可能を可能に」

『ム』

「……………始まるぞ」

第4章浪漫って大切だよ

「くそつ、なんだこりゃあ！」

一足先に現場に向かった馬超は、敵の存在感に圧倒されていた。

身の丈は六十尺《約一八メートル》

その姿は袁紹に酷似し、トレードマークである縦ロールは、バネ仕掛けで射出されるようだった。

何より鋼鉄製の外皮にどう立ち向かうかが、兵士たちにとっての課題であった。

矢も槍も剣も通用しない袁紹ロボが、家の屋根を突き破って子供たちをさらっていくのを止めなければならないのだ。

「うるあああつ！白銀乱舞！」

馬超の攻撃による金属音が響く。

袁紹ロボが反撃を試みようとした時には、馬超の姿ははるか後方に走り去っていたが、その巨大さ、頑強さを前にしては、攻撃そのも

のは効果が薄いように見えた。

「待てえいつ！」

闇夜を貫く咆哮に、袁紹ロボ、馬超、兵士たちが振り向いた。

華蝶仮面に代わって悪を討つ正義の人型兵器、華蝶炉坊の初陣であった。

「顔良さん、文醜さん！何か来ましたわよ！」

「そんなの見りゃわかりますって」

「どうします、麗羽さま！？」

袁紹ロボの頭部には三人組の姿があった。

華蝶炉坊と違い、搭乗タイプのような。三人が瞳に当たる部分から、華蝶炉坊を眺めている。

「なんでも構いませんわ！どうせ、この武将搭載式巨大黄金カラクリ《袁紹》に勝てる相手などいませんものね！お二人とも、さつさとやっっておしまいなさい！」

「あらほらさつさー！」

「もう、麗羽さまも文ちゃんも適当なんだから……。じゃあ、いきますー！」

顔良の操作で袁紹ロボの駆動部が唸りをあげる。腕を振り上げて迫る袁紹ロボを、華蝶炉坊は受け止める。

諸葛亮と姜維の設計にミスはない。

勝負は操縦者の戦術に委ねられたのだ。

「ええい、いつまで手間取ってますの！？文醜さん、飛び道具の出番ですよ！」

「よし、来た！当たるも八卦、当たらずも八卦……くらえええっ！」

文醜の元気な掛け声と共に、袁紹ロボの縦ロールがドリルのように射出される。至近距離からの一撃に、華蝶炉坊はよろめいた。

「たたみかけておあげなさいっ！」

戦況は、武器の差において袁紹側に軍配を上げつつあった。

「博士、こいつに武器はないのか？」

華蝶仮面もそれに気付いたようだった。

諸葛亮に振り向き、隠された機能がないか尋ねる

『まだな「はい、右側にある小さな棒を押し込んでください。」…』

…』

翡翠の言葉を遮り、諸葛亮は待つてましたとばかりに頷いてみせた。

指示に従い、ボタンを押すと、華蝶炉坊の右大腿部が開き、剣の柄のような部分が内部から現れる。

「華蝶炉坊の武器です！」

「武器を取れ、華蝶炉坊！」

『止めといたほうが……』

《がおー！》

華蝶仮面の指示で、華蝶炉坊は、右手に柄を握る。そしてそのまま引き抜いた。

ジャラジャラジャラという金属音がして、柄の先に繋がっていた鎖が飛び出す。最後にトゲ付き鉄球がすぽんと抜けて……華蝶炉坊は鎖付き鉄球を構えた。

「ろ、浪漫は感じるが……大丈夫かそれ!？」

「さあ! 思いっきり、ぶつけちゃってください!」

一刀の炫きを無視して、諸葛亮が華蝶炉坊に指示をする。

華蝶炉坊は指示通りに、鉄球を振り回し、袁紹ロボに投げつけさせた。

「はあっ!」

「……ほいつ!」

しかし鉄球はあっさりと両手で受け止められた。袁紹ロボと華蝶炉坊は、間拔けな攻防の結果にどう反応していいか分からず、停止する。

(あ、やっぱり……)

そう思ったのは一刀と翡翠だけ。

「……………」

「……………え、えーと」

最初に我に返ったのは、袁紹だった

「こ、こんな無骨な武器で、美しいわたくしを倒せるわけありませんわ！ほーっほっほっほっ！……顔良さん、投げ返しておやりなさい」

「はい、麗羽さま」

鉄球が投げ返される。

華蝶炉坊は、袁紹ロボ同様、それを両手で受け止めようとしているようだった。

これでは単なるボールのパス回しだ。

一刀はそう思ったが、華蝶炉坊は直前になって自分の失敗に気付いたようだった。

そう、華蝶炉坊の片手は、鎖をもっていたために、ふさがっていたのだ。

鉄球が華蝶炉坊の腕の隙間を抜け、胸に当たる。

その鉄球が足の上に落ちて、爪先を潰すまで、そんなに時間はかからなかった。

《が、がお！？》

間拔けな悲鳴をあげて、華蝶炉坊がしゃがみこむ。

華蝶炉坊は、痛みを感じているのか、体全体をぶるぶると震わせていた。

「……ある意味、ここまで人間くさいロボットを作れたっていうのはスゴイことなんだろうけどな」

『……言わないでください』

一刀がさらに呟くと横にいた翡翠が落ち込みながら答える

その横では諸葛亮が「はわわっ！はわわっ！」と悲鳴を上げている。

「とんだおマヌケさんがいたのですわね！おーっほっはっほっほっほっほー！」

華蝶炉坊の無防備な背中に、袁紹ロボの縦ロールドリルが次々と連射される。

《おおおおおおー！！》

低い悲鳴を上げて、

華蝶炉坊は……轟沈した

この後、袁紹口ボは、北郷軍の決死の抵抗により、撤退していくことになる。

しかしその物約被害たるや、全壊八棟、半壊二八棟、重軽傷者多数という、極めて大規模なものとなってしまった。

第4章 浪漫って大切だよね（後書き）

前書きのあれ

セリフ大分間違ってるかも……

第5章 ガン ムハンマーって実際あんまり使えないような気がする（前書き）

今回からいろんなアニメの名セリフを言っていきたいと思います（3年Z組銀八先生風に）

『言って欲しいセリフ、かつこいいセリフ等がありましたら教えてください』

では

アンタが裏切るからあー！！

《シン・アスカ》

アスランこそ真のDestinyの主人公だと思う

《北郷一刀》

食べたくない、食べさせないで 《愛紗の炒飯を食べさせられよう
としている翡翠》

これって名言か？

《傍観者・星》

第5章 ガン ムハンマーって実際あんまり使えないような気がする

「結局のところ、武器が悪い……浪漫だけじゃ勝てないと思うんだ」

明けて翌日。

軽食喫茶《胡蝶》にて、一刀は趙雲、姜維、貂蝉、諸葛亮をあいてに、昨日の華蝶炉坊の敗因についての考察を話していた。

建前上、博士 華蝶仮面四号や華蝶仮面の正体は不明ということになっていてため、

一刀とも《腹ごなしの雑談》という名目で話を進めている。そうは言っても諸葛亮は責任を感じているのか、昨日から終始俯きっぱなしであった。

「すみません。武器にまで気が回りませんでした……」

「いやほら、朱里のせいじゃないんだし」

「それはそうですけど……はう……」

「で、主。つまり主は新しい武器があれば勝てると、そう言うのだな？」

それまで沈黙していた趙雲が、一刀をみる。一刀は自信を持って頷いた。

「ああ。力は互角だったんだし、あとは武器の性能差だと思う」

「ふむ」

「で、でもあんな大きな炉坊が使う武器をどうやって作ったらいいんでしょう？ まともな武器を作るとなると専門家じゃないと……」

『しかし、今の技術じゃビームサーベルは無理だからな……』

諸葛亮は早々に自分たちだけではムリだと宣言する

「武器が作れないって………ガダムハンマーは、ジョークグッズ扱いかよって何で翡翠は、ビームサーベルの事を知ってるのさ？」

『それは……』

翡翠は戸惑いを見せながら

『禁則事項です』

口に手を当てながら某角 書店のロリ未来人の真似をした。

「なんでそんなことまで！！しかもかわいい！」

一刀のツッコミと問題発言は無視され、一同は優秀な鍛冶職人を探
す必要があるという結論に達しつつあった。

「新しい住民の中に腕のいい鍛冶職人はいなかったかな？」

『そうですね……』

政務を行うかのように、一刀は翡翠に尋ねる。

翡翠の記憶になれば、市街を一軒一軒、尋ね歩くしかなかった。
しまう。

一刀は期待を込めて、眉間に皺を作って記憶をたぐる翡翠を見つめた。

「あー、ハラ減ったー！……おう？雁首そろえて、なにシケた顔してんだ？」

いきなりドアを開けて中に入ってきたのは馬超だった。

その途端、一刀の顔色が変わる。彼女はここのことろずっと警備の担当者だった。

翡翠もピンときたのか顔色が変わる

つまり1日中街を歩き回っている貴重な情報源だ。

『翠、知り合いに鍛冶職人いませんか？できれば大きな武器を作れそう！』

「なんだよ、いきなり？ま、まあ、鍛冶職人なら……親戚に心当たりがないわけじゃないけど？」

「本当か。是非紹介してくれないか？」

「頼む」

『お願いだ。』

「お願いしましゅー！」

「お願いよおん」

一刀、趙雲、姜維、諸葛亮、貂蝉の五人が示し合わせたように馬超に詰め寄る。

「な、な、な……何なんだよ、おめえらぁあつ！？」

壁際に追い詰められた馬超は、その迫力に恐怖の悲鳴をあげたのだ。
つた。

第5章 ガン ムハンマーって実際あんまり使えないような気がする（後書き）

今回は区切りが良いので短いですがここまでです。

前書きにも書きましたが名言があつたらその作品のタイトル、キャラの名前、セリフを書いてくだされば、書いていききたいと思います

出来れば感想も書いてくれると嬉しいです

番外編 二人の朝の風景（前書き）

書きたくなった。

以上

（緋翠はこの作品にBL要素を取り入れる気はありませんよ）

今日の名言

あきらめないっ あきらめない あきらめない あきらめない あきらめない
いっっっっ！ あきらめないわー！

《神楽坂明日菜》

あきらめたらそこで終わりだ

《星》

あきらめるしか無いときもありますけどね……

《翡翠》

分かるよ

《北郷一刀》

番外編 二人の朝の風景

これはご主人様と僕のたまにある朝の風景です

ご主人様は朝の弱い僕をたまに起こしに来てくれます。

ドンッドン

「翡翠〜起きてるか〜？」

『 スウスウ 』

ガチャ

「たく、まだ寝てるのか？おら！！起きろ！」

布団を剥ぎ取り起こそうとします

『 ウッ！……………おはようございます。一刀 』

目を覚まし挨拶をすると

『 しかし、どうしたんですか？こんな時間に 』

午前6時である。

「早く目が覚めたから朝食を作ったんだよ。」

『だからって、こんな時間に来ることは無いでしょう。此処、女の子の部屋じゃ無いんですよ。入る場所と時間を間違えてませんか？』

そう言つと一刀は

「えゝいいじゃんか別に、こんなかわいい翡翠の寝顔をみるついでに朝食を作つて来たんだから黙つて食う。」

そう言つて勝手に朝食の用意をする

（別に一刀は良いかもしれませんが僕が怒られるんですよ愛紗殿たち。）

そうして朝食を並べ始めいい匂いが部屋に漂う。

「出来たぞ特製みそ汁定食。」

そうして並べたご飯を二人で食べながらいろんな会話をしていく。

『「ごちそうさまでした」』

食べ終わり片付けを済ますと

『さて仕事をしますかね』

「え、もうするの?」

『ええ。何時も朝食を食べたら直ぐにやっているじゃ無いですか。』

「少し遊ぼうと思って早く起きて来たのに……………」

『遊ぶって……………メイド服ならもう着ませんよ。』

「チッ、なら俺も部屋に戻って少ししたら始めるか」

こうやって僕たちの1日は始まります

勿論愛紗殿にはばれてませんよ。

ばれたらどんな事が待っているか……

考えるだけで恐ろしいですね

番外編 二人の朝の風景（後書き）

本編もちゃんとすすめますよ

第6章 年寄りには優しい人が多いと思う（前書き）

「第6章年寄りには優しい人が多いと思う」

『始まります!』

今日の名言

ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところへ来なさい。以上!

《涼宮ハルヒ》

ただの人間には興味ありません。巨乳、貧乳、ロリッ娘、男の娘がいたら俺のところに来い!

《蜀に舞い降りた天の遣い北郷一刀》

なぜ男の娘が入ってるんですかッ!?

《蜀の美少女?翡翠》

第6章 年寄りには優しい人が多いと思う

「おい、鉄爺さん」

馬超に連れられてやってきたのは、成都のはずれ、職人たちが多く集まる地域だった。

看板には「研ぎ・包丁」とある。しかし人の気配はなく、馬超の呼びかけに応じて中から薄汚い格好をした男が顔を出さなければ、無人ではないかと思うほど寂れていた。

「おお、馬超じゃねえか。でっかくなりやがったな」

仕事用のエプロンを脱ぎ捨てながら表に出てきた男は、ゴツゴツとした手と日に焼けた肌と白髪を持つ、顔中に年輪を刻んだ老人であった。

「……ああん？全然変わってねえよ」

「そうかあ？前に見た時より、いろんなところが成長してる気がするんだがな。けっけっけつ。男でもできたか？」

「なあっ！？こ、こ、このスケベ親父があっ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る馬超にも動じず、老人は白い歯を見せて笑う。

『翠殿、そろそろ紹介してもらってもよろしいですか？』

「あつ、悪い、翡翠ええと、鉄爺さん。実はあたしの友達とご主人様をお願いしたいことがあるらしいんだ。」

、
紹介された一刀と姜維は一步前に歩み出た。

馬鉄と呼ばれた老人は、一刀を下から睨め上げる。

「へえ……あんたが馬超の主人か。聞いてるぜ、天の遣いだってな」

「実は武器を作って欲しくて、足を運んだんです」

「なに？武器だと？」

一刀の言葉に、馬鉄はあからさまに不快な表情を作った。

『はい。身の丈が六十尺を超える武将が扱えるような……大きくて丈夫な槍、もしくは剣を注文したいのです。』

「断る」

馬鉄はきっぱりとそう答えた。

先ほどのまでのおちゃらけた表情は、そこにはない

反論を許さない。

有無を言わせない。

そんな頑なな意思を全身から漂わせる。

「……どうしてですか？」

だからこそ一刀は尋ねた。

彼は「断る」と言った。

「できない」とは言っていないのだから。

「俺はもう引退してるんだ。どうせ今の世の中には、まともに武器を扱える武将なんていねえ。だったらわざわざ俺が作る必要もないだろう。他を当たってくんな。」

馬鉄は吐き捨てるように言う。

それは絶対的な自身の腕への自信から来る言葉。

一刀と姜維は、彼こそ華蝶炉坊に相応しい武将を作る唯一の人物であると確信した。

「あなたにしか頼めないんです」

だが一刀の訴えに、馬鉄は首を横に振る

「そっちの都合など知らん。用が終わったなら、さっさと帰ってくれ」

馬超が口を挟む暇もなく、一刀や諸葛亮は店先から追い払われてしまふ。

一刀は何度か説得の言葉を並べたが、馬鉄は聞き入れようとしなかった。

しかし姜維はただその場を見据えるだけ

一同の間に出直そうという空気が高まっていく。

ただ二人、趙雲と姜維だけは、その空気に飲まれていなかった。

『ご老人、少し待っていただけませんか？』

「なんだ、おまえは？」

姜維は馬鉄の不遜な物言いにもどうじず、言った。

、『確かにこれまであなたの作った武器を使いこなせる者はいなかったかもしれませんが。ですが今この瞬間にも使いこなせる者が現れないとも限らない。』

姜維が一旦言葉を切ると、

「それでもなお、断るといふのなら、この趙子龍、腑抜けた老人の作る武器など棒きれ一本にも及ばぬものと考えさせていただく！」

『当然ですね。』

「……なんだと。言ってくれるじゃねえか、小娘共」
馬鉄は趙雲と姜維を射殺さんばかりに鋭く睨み付ける。だが趙雲たちはそのような視線をものともしない。
むしろ

『誰が小娘ですか、僕は男ですよ。』

刃向かっている。

そして趙雲は続けた。

「ならば使いこなせぬかどうか試してはどうだ？」

「面白い。それならうつてつけのものがある。誰にも使いこなせなかったんで、神に捧げた最高傑作が黄山の山頂にある。持っていけるものなら持つていくといい。そちらの要望に沿うものだと思うぜ」

馬鉄はそう言つてククツと喉の奥で笑った。その言葉に反応したのは馬超だった

「待てつて！あれを使えつてのか！？」

「その通り。自分の言葉に責任を持つてもらわねえとな」

「でも、あれは……」

『何か知っているのですか？』

慌てる馬超に姜維は尋ねた。

「翡翠……ああ、昔、鉄爺が金持ちの道楽に巻き込まれた時に、そりやもつ、でつけえ槍を作ったことがあんだよ。当然、誰も使いこなすことなんかできなくてさ、依頼主も文句を言ったんだけど、爺のヤツ、四の五の言ってねえで使えるヤツをつれてこいつで怒鳴り返してさ。ってまあ、そういう逸話のある槍があんだよ。」

「なるほど。面白い」

見れば趙雲の艶やかな唇が弧を描いていた。

「ではその槍、貸していただく。」

「はっはっはっはっ！上等だ。しょせん若気の至りで作ったものだ。つかいこなせたのなら貸すなんてケチなこと言わん！くれてやる！それに加えて、いつでもおまえの要望に沿う武器を作ってやるう！はっはっはっはっ！」

馬鉄が笑う

「ご厚意感謝する。はっはっはっはっ！」

『ええ、クスッ』

趙雲と姜維が笑った

そして唐突にその笑いがピタリと止む。

「では主。私が戻るまで成都を頼みますぞ。無論翡翠もな。」

『当然、何を当たり前のことを言っているのですか？』

趙雲は即座に踵を返した。

一刀が止める間もなく、城外へと向かってしまう。

「分かった！待っているからな！」

一刀の呼び掛けに、趙雲は片手を突き上げて応えた。

第6章 年寄りには優しい人が多いと思う（後書き）

更新遅れてすみません

次回は早く更新します。

番外編あなたが僕で僕が貴方で その1（前書き）

大分放置していました……

すみません

しかも久しぶりの投稿が番外編……

更新速度をもう少し早めていきます

今日の名言

想いだけでも、力だけでもダメなのです。

《ラクス・クライン》

俺が……俺であるために……

《格好をつけている翡翠》

キャラが違っぞ翡翠

《ツツコミ 一刀》

何が起こったのだ？

《見学者 星》

番外編あなたが僕で僕が貴方で その1

俺の名前は北郷一刀

一応この成都の太守をしているしがない日本の学生だ

今は仕事が終わったんで散歩をしている

すると愛紗を見つけたから声を掛けてみたんだ

「愛紗」

「あ、ご主人様！丁度良かった。」

愛紗が此方に来てくれた。

何かを手を持っている。

「あ、あのご主人様／＼／＼」

「どうした？」

「あの、これを食べてくれませんか？／＼／＼」

ダークマターがそこにはあった

（うん、無理 死ぬな、これを食べたら。）

どうしようか迷っていると星と翡翠が近くにいた

「おい翡翠、星」

『何ですか？ご主人様』

二人が近づいてきた。

「二人ともちょうど良かった炒飯を作ったんだ。食べてみてくれ。」

『「なに！？」』

ダッシュで逃げようとする二人

ガシッ

『……離してください』

「やだ。」

翡翠だけは逃がさない

「すまんな翡翠。愛紗、私は用事があるからもう行くぞ」

『逃げるんですか！？』

「ああ、わかった」

そう言って星は急ぎ足で何処かに行った

「さあではご主人様、翡翠食べてみてください」

『（ここまでか……）わかりました』

翡翠は諦めたのか抵抗を止めた

「翡翠」

覚悟を決めた翡翠に感動を覚えそうになった

「では、どうぞ」

「『い、いただきます』」

恐る恐る炒飯を口に入れる
俺と翡翠

（クッ、やはり不味い）

そう思いながら翡翠に目をむけると

『ウ〜ウ〜』

顔面蒼白になりながら口に無理やり掻き込んでいた

（翡翠がこんなに頑張ってるんだ俺が頑張らないでどうする……!）

最後に目一杯口に含んで俺は意識を失った

最後にみたのは翡翠が同時に倒れたところだった

二時間後

「……………翠……………翡翠！！」

愛紗が俺を起こす

「あ、おはよう愛紗」

「！！翡翠、大丈夫か？ご主人様のような口調だぞ。」

「は？なにいつてるんだ愛紗。翡翠なら彼処に」

俺が目を開けるとそこには

俺が寝ていた

って待て待て俺！

落ち着け

もう一度見てみよう

「……………」

やっぱり俺だ

「愛紗彼処に寝ているのは」

「何を言ってるんだ翡翠？ご主人様だろう。」

愛紗が当たり前の様に返してきた

そんなことをしていると

向こうで俺が目をさます

side 翡翠

『んっ……………』

何で僕は寝ていたんだろう？

確か愛紗殿の炒飯を食べてから記憶が曖昧だな

「ご主人様！ようやく起きてくださいましたか！」

ご主人様？

『何を言ってるんですか愛紗殿？』

そうやって言うと愛紗殿の動きが止まる

「ご……ご主人様？」

『嫌ですねえ愛紗殿。僕がご主人様な訳無いじゃないですか？』

そう言って奥に目をむけると

僕がいた。

s i d e o u t

s i d e 愛紗

ようやくご主人様が目を覚ましたと思ったら

愛紗殿

なんて呼ばれてしまった。

まるで翡翠の様に

さつき翡翠を起こした時には

愛紗

って呼ばれたし……まるで二人が入れ替わった様な感じがする

そんなこと起こるはず無い

と思いつつも一度確認の為名前を呼んでしまう。

「ご主人様」

「なんだ？」

翡翠が反応する

「……………翡翠」

『なんですか？』

ご主人様が反応する

確信してしまった

……………二人は入れ替わったのだ

s i d e o u t

s i d e 一刀

愛紗が翡翠の名を呼ぶと向こうの俺が反応する

俺は嫌な予感がしてすぐ側にある水桶の中を覗き水を鏡がわりに顔を見た

……………翡翠が映った

何で？

待てよ俺

今水に映っているのは翡翠だな。

まあそれは良いが……

しかし俺は一刀のはずだ。

でも映っているのは翡翠

ワケわからん

s i d e o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746m/>

華蝶仮面と愉快的仲間？

2011年4月24日01時02分発行